

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02506

研究課題名(和文) 17世紀～18世紀前半のイギリス文学における道徳的テーマと国民意識形成との関連研究

研究課題名(英文) The Study on the Relationship between Theme of Morality and the formation of the identity of a Nation in the Seventeenth and the Eighteenth century English Literature

研究代表者

園井 千音 (SONOI, CHINE)

大分大学・理工学部・教授

研究者番号：70295286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は自由の精神と寛容を特徴とするイギリス国民意識形成過程とイギリス文学との構築的関係を17世紀から18世紀前半イギリス文学の道徳的テーマとの関係において検証した。第一にジョン・ミルトンと共和主義思想の関連、次に17世紀イギリス内戦時のイギリス国民意識と自由と寛容の精神との関連、17世紀～18世紀における科学活動と国民意識の特徴との関連、ミルトンの自由希求精神と18世紀イギリス文学の思想的影響関係、18世紀前半イギリス社会における道徳哲学検証、イギリス国民意識萌芽と16世紀後半イギリス社会との関連について分析した。イギリス国民意識の特質が17世紀～18世紀に明らかに構築されたことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の社会的意義はイギリス国民意識の特質を分析しイギリス文化の独創性、自由の精神、寛容、統合力の形成過程を理解し、現在の国際社会における民族間、国家間、宗教的違いに起因する葛藤に対する解決方向を探ることだ。イギリスがヨーロッパ諸国の中でも独特の国民性を維持している理由の一つにイギリス文学の道徳的テーマ、例えば人間の精神における自由と寛容の精神の重要性に対する認識が国民意識形成に影響し、それがイギリス国民精神の基盤を形成していると仮定しその検証を続けた。このことは国際社会が直面している民族、もしくは国民意識と社会の関係性の変容と問題の性質を予測し、また同時にその収束の方向を示すことができる。

研究成果の概要(英文)：This study verified the relationship between the process of the formation of the British national consciousness, characterised by the spirit of freedom and tolerance, and the moral theme of English Literature from the 17th century and the early 18th century. This research focused on the following six dimensions: liberal thought and John Milton and republicanism, British national consciousness and the liberal ideology in English Civil Wars, scientific activities in England from the 17th to the 18th centuries, the ideological relationship between Milton and the Romantic poets, moral philosophy in the early 18th England, the theme of English Literature and the British identity. As a result, the nature of British consciousness became clarified from the 17th to the 18th centuries, and the germ of the British identity lied in the late 16th century, which would be elaborated in the next research subject.

研究分野：イギリス文学

キーワード：イギリス文学 ミルトン 国民意識 自由 道徳 寛容

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 17世紀以降のイギリス文学は、第一に国内の政治的不安定、近隣国との外交的軋轢に起因する混迷の世相を背景に成立する。同時に、その道徳的性質、宗教的主題、も内包し、ポストルネサンス文学の楽天的理想主義を超える複雑な感覚を内包する。第二に、特に道徳的性質はイギリス文学の公共的特質の本質として、国民及び国家意識の形成に寄与する。以上の課題については、2004年度から17世紀から20世紀におけるイギリス文学の特質と国民意識構築の関連研究として継続的かつ横断的に進めた。これまでの分析研究においてイギリス文学の文学的主題と思想の関係においては、例えば、17世紀のアンドルー・マーヴェル、ミルトン等の政治的宗教的作品における主題がイギリスの国家批評、あるいは教育的意味において国民意識を構築する効果を与えたこと、また18世紀末から19世紀初頭にかけてのロマン主義文学における文学的主題は、ヨーロッパの啓蒙主義を基盤とした人間の基本的人権に関する強い欲求やそれに関連する共和主義の隆盛における理想主義の要素を内包し、人間の自由の確立を中心概念とするイギリス国家及び国民意識を構築する公共的性質をもつことが明らかとなった。また19世紀以降のイギリス社会においては科学思想の衝撃、宗教的懐疑、社会的経済的理論の発展、ヨーロッパ諸国との関係における国家的体制の変化などが国民意識にある種の不安を与え、宗教的思想を複合する国民国家意識を統一する価値観を希求する社会的動きとなる。19世紀以降のイギリス文学における文学的主題はこのような社会的変容における自己探求や宗教的思想的複雑さを内包するイギリス国民性の道徳的思想的根幹を示し、それが波及的にイギリスの文化的性質を構築する公共的役割を果たすことが明らかとなった。

(2) このようなイギリス文学の公共的特質は他のヨーロッパ諸国における思想的傾向、例えばフランスにおける観念論的傾向や継続的社会改革性質とは異なり、多様な宗教的哲学的及び社会的要素を含む国民意識と柔軟な思考性を基盤とする思想文化形成という点において独自の公共的性質として理解することができる。

以上の分析において、イギリスの国民意識の基盤には、自由意志、自己発見、懐疑精神等がコンスタントに存在し、その独自の思想的要素は特にイギリス国民が宗教的思想的変革を経験する1640年代の内戦時から人間の基本的感情に対する関心や自由の権利の確立が思想的焦点となる1770年代ロマン主義思想の時代においてその基盤が形成されたことを証明することが必要であることが分かった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、イギリス文学における道徳的主題と国民意識形成の過程を文学的思想的に分析し両者の相関関係の本質は何か、またその共通する特質の基盤形成が1770年代のイギリスロマン主義思想の基盤として存在することを証明する。そのためにイギリス社会の社会的思想的近代化が進む1640年代から1790年代においてイギリス文学及び国民意識の特質である人間の自由意思、もしくは善性に対する強い認識、思想的寛容さなどの道徳的性質が文学と思想の複雑かつ不可分の影響関係により形成されたことを検証する。

(2) 本研究においてはこれまでの分析で明らかになったイギリス文学の道徳的性質と国民意識形成との関連について1640年代から1790年代において文学的社会的資料の分析をより詳細

かつ体系的に進めイギリス国民意識の基盤的性質を検証する。さらにイギリスの国家的成立と国民意識形成の萌芽期について 1550 年代イギリス社会と文学についての検証の可能性について考察する。

### 3．研究の方法

(1) 本研究は 1640 年代から 1790 年代までのイギリス文学における道徳的テーマと国家意識形成の過程を文学的、思想的に分析し、イギリス文学の道徳的テーマと国民意識の特質が 1770 年代ロマン主義時代にその基盤が明確に形成されたことを証明する。具体的には国家的動乱の中におけるイギリス国民意識の基盤的形が焦点となる 1640 年代イギリス内戦以降の 17 世紀イギリス文学の自由思想、形而上思想、ミルトン文学、懐疑思想、自己発見哲学等の道徳的テーマと国民意識形成との関連分析、1700 年代から 1760 年代までのロマン主義思想の前駆的文学の道徳的思想的コンテクストの分析、1770 年代から 1790 年代ロマン主義文学と国民意識形成の関係を総合的横断的に分析し、イギリス文学の道徳的テーマの特質と国民意識形成の関連の本質を明らかにする。

(2) 本研究は次の 5 つの課題を中心に行う。

1640 年代以降の 17 世紀イギリス文学(アンドルー・マーヴェル、ミルトン等)の道徳的テーマと国家意識形成の思想的コンテクストの相互関係を検証する。

との関連において 1640 年代から 1690 年代イギリス社会における宗教的思想とイギリス国民意識形成との関連を、市民革命期における宗教改革的要素の分析(ミルトン文学との関連、アングリカニズム、カトリシズム、ピューリタニズムの関係、宗教的寛容論を中心に)、形而上的思想(ジョン・ダン文学及び思想との相互関係)と懐疑的思想との関連、また自然科学思想(ニュートン、ロバート・ボイル等)と神学思想の相克の関連を中心に分析する。

1700 年代から 1760 年代イギリス文学(トムソン、アーケンサイド等)における道徳的テーマと人間の自由の主張、道徳哲学思想等との関連、また自然科学の発展(ジョゼフ・プリーストリー等)と宗教的哲学的思想(ヒューム、ヴォルテール等)の関連などを中心にロマン主義思想の前駆的要素とイギリス国民意識形成との関連の本質を検証する。

から との関連において、1770 年代のロマン主義思想の発現とイギリス国民意識形成の基盤の本質の分析をすすめる。

上記課題の研究結果に基づき、1640 年代から 1790 年代までのイギリス文学における道徳的テーマとイギリス国民意識形成における関連の本質について研究結果を纏める。

上記 から は主に研究代表者が行なった。また と の自然科学思想における分析については有する研究分担者平田耕一九州工業大学大学院教授の協力により行なった。 と におけるイギリス文学と国民意識形成との関連分析において文学的専門知識を有する園井英秀九州大学名誉教授、杉本美穂福岡女学院大学非常勤講師、の研究協力により行なった。また におけるイギリス社会と道徳哲学との関連における社会学的分析において園井ゆり広島大学大学院准教授の研究協力を得た。

### 4．研究成果

( 1 ) 1640 年代以降のジョン・ミルトンの政治的散文を中心に 17 世紀イギリス文学の道徳的主題と国家意識形成の思想的コンテクストの影響関係を検証した。この結果、ミルトンの自由思想は 1640 年代から 1650 年代においてイギリス社会改革思想の機運の高まりと同時に強まり、君主制廃止がイギリス社会発展のための必至の結論であることを信念として維持していたことが証明された。

アンドルー・マーズの文学における道徳的構築力について検証した。マーズの 1650 年代政治詩(クロムウェル三部作)における共和国体制の正当性と王権支配への郷愁との間の感情的緊張に隠されたマーズの真意とその道徳的性質を分析した。三部作におけるマーズのクロムウェルの政治、宗教、人間性に対する複雑な視点と変遷する政治的状况に対する葛藤、幻滅の克服、憂国の感覚、あるいは徳義の思想を考察した。またマーズ後期の政治的諷刺詩(主として「画家への指示」詩)の特質と道徳的主題の関連を分析した。その結果、マーズ文学は、17 世紀諷刺詩の中であって、主題と審美性の調和を達成し、そのためにイギリス詩独特の道徳的性質と構築力を一貫して表現したことを証明した。

( 2 ) イギリスの科学的発展の基盤となった科学的活動の状況を分析するため特に 16 世紀後半から 17 世紀前半にかけてのイギリスにおける科学的潮流を出版状況において考察し、科学活動が社会的身分や宗教の違いにかかわらず自由に社会において展開されていたことを証明した。ジョン・ニュートンなどの科学的発見の時代といわれる科学活動を可能にした社会的基盤が王立科学協会設立(1660 年)以前から徐々に形成されたと仮定し検証した。具体的にはイングランドの出版向けの最初のカatalogueである : A. Maunsell: *The Catalogue of English Printing Books* (1595), (以後, CEPB), 及び : W. London: *A Catalogue of the Most Vendible Books in England* (1657, 1658, 1660), (以後, MVB)に着目し分析した。さらに CEPB と MVB と British Library のオンラインデータベース English Short Title Catalogue (ESTC) を照合し、16 世紀後半から 17 世紀前半のイギリスにおける自然哲学書のベストセラーや著名な出版者を定量的に分析した。この結果、16 世紀後半から 17 世紀前半のイギリス社会においては活発な科学活動が行われ、それが当時の科学的潮流をけん引したことが明らかになった。

( 3 ) 『離婚論』 (*The Doctrine and Discipline of Divorce*, 1643)、及び 『アレオパジティカ』 (*Areopagitica*, 1644) 出版の 1643 年から 1644 年にかけてはミルトンにとっての人間の自由の思想とイギリス社会との関係を分析した。ミルトンは権威者の慣習に従うことが間違いを引き起こすものであり、人間の道徳心にてらしあわせ、物事の真偽を確かめることの重要性を主張する。『マルチン・ブーサーの判断』 (*The Judgement of Martin Bucer*, 1644) に続き、『四絃琴』 (*Tetrachordon*, 1645)、そして 『懲罰鞭』 (*Colasterion*, 1645) においてミルトンは離婚における夫婦同権を主張し、また夫婦が社会構成の単位であるとみなした。この思想はミルトンと同時代のトマス・ホブズ、またその流れをくむジョン・ロックの議論における人間の自然権において発展する革新的性質を持っていたといえる。

1640 年代から 1650 年代のミルトンは伝統的宗教的規律に対する改革の必要性を強く感じるようになっており、それは議会における独立派(長老派から独立した考えをもつピューリタン)の台頭が同時期であった。これは偶然ではなく、イギリス国内の社会的精神的機運がより宗教的及び社会的改革を進めることが必至となっていたことを示す。

(4) ミルトンの自由の思想と 18 世紀イギリスロマン派詩人の思想的関連を分析した。ミルトンの自由思想は 18 世紀末のヨーロッパにおける社会改革運動の高まりとともに再評価された。例えば、18 世紀末のイギリス社会改革論においてミルトンの政治思想は人間の基本的自由確立を支持する文脈として理解されることが多くなった。また同時代の第一世代のロマン派詩人(ウィリアム・ブレイク、S.T. コールリッジ、ロバート・サウジー、ウィリアム・ワーズワースなど)の間においては、ミルトンの共和主義思想は彼らの人間の平等や自由の精神への関心と呼応し、それぞれの共感の濃淡の差はあれ思想的影響を与えた。

サウジーはロマン派詩人の中においても最もミルトンの主張した人間の自由の思想に注目した。サウジーが共感した共和主義思想の理念は、ミルトンの信念と同様に、自由と人々の安全が社会システムにより守られなければならないとする人道主義的な感性に基づくものであった。1790 年代にサウジーが興味を持ったのは、トマス・ペインやウィリアム・ゴドウィンの政治的思想であった。両者とも共和主義概念の実現の重要さと人間の自由と幸福を促進するための社会的改革の必要性を主張した。この意味において、1650 年代の共和主義はサウジーにとって、見習うべき直接の手本であるばかりでなく、彼が信じる社会的理論の提示でもあった。

(5) イギリス国民意識の自由と寛容という特質を 18 世紀イギリス社会における貧困問題との関わりを検証した。特に貧困と子供の問題について注目し個人の慈善的活動が次第に社会的活動に発展した過程を分析した。1739 年にロンドンに貧困児童救済施設であるファウンドリング・ホスピタル(Foundling Hospital, 以下、FH と記す)を創設したトマス・コーラムに焦点をあて、その設立事情を検討し、FH の創設に至ったコーラムの動機及び FH 創設に至るまでの過程(18 世紀初頭から 18 世紀半ばまで)を検証した。コーラムの愛他的行動における道徳性は私利私欲を離れた公共的性質を持つと理解できる。この思想的特徴と 18 世紀イギリス哲学のシャフツベリ、ハチスンなどの道徳感覚学派の関連研究は次の課題研究として継続する。

(6) イギリス国民意識と文学の関係を考察する場合に国民意識形成萌芽期として 16 世紀半ばの分析が必要であることが分かった。本考察においては主権国家という意識の萌芽が 16 世紀半ばイギリスに存したという仮定に基づき特にウィリアム・シェイクスピアの英国史劇を中心に分析している。これまでの分析においてイギリスの国家的成立と国民意識がテューダー朝を中心とするシェイクスピア劇中において作者の意図もしくは社会的要請の影響により複雑に形成されたことを証明した。本課題は次の研究課題として継続する。

#### <参考文献>

Chine Sono, *The Polemics on Liberty in Southey's Joan of Arc in Relation to John Milton*, 『大分大学工学部研究報告』, 65 巻、2018、1-7. 「大分大学学術情報リポジトリ」URL:<https://opac2.lib.oita-u.ac.jp/webopac/TD00531014> (全文公開)

園井 千音、 「18 世紀におけるジョン・ミルトンの政治的文献批評とイギリス・ロマン派詩人の自由思想との関連:ロバート・サウジーとの関連を中心に」、『大分大学理工学部研究報告』, 67 巻、2020、1-12. 「大分大学学術情報リポジトリ」URL:<https://opac2.lib.oita-u.ac.jp/webopac/TD00570465> (全文公開)

園井 ゆり、「トマス・コーラムと 18 世紀イギリスにおけるロンドン・ファウンドリング・ホスピタル」、『環境科学研究』, 第 14 巻、2019、37-57. 「広島大学学術情報リポジトリ」URL:<http://doi.org/10.15027/48892>. (全文公開)

園井 ゆり、「18 世紀イギリスにおけるロンドン・ファウンドリング・ホスピタルに関する社会学的一考察」、『社会文化論集』, 第 16 号、2020、33-54. 「広島大学学術情報リポジトリ」URL:<http://doi.org/10.15027/49756>. (全文公開)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 園井 千音	4. 巻 67
2. 論文標題 18世紀におけるジョン・ミルトンの政治的文献批評とイギリス・ロマン派詩人の自由思想との関連：ロバート・サウジーとの関連を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大分大学理工学部研究報告	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Chine Sonoï	4. 巻 65
2. 論文標題 The Polemics on Liberty in Southey's Joan of Arc in Relation to John Milton	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大分大学工学部研究報告	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 "Robert Southey's Joan of Arc, Pantisocracy and Milton"
3. 学会等名 第4回西欧思想研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 「共和制の政治的変節--アンドルー・マーヴェルとオリヴァー・クロムウェルとの関係において」
3. 学会等名 第5回西欧思想研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 「ミルトンの自由概念--『アレオバジティカ』を中心に」
3. 学会等名 第6回西欧思想研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 自由概念の追求：ロバート・サウジー『ジャンヌ・ダルク』（1796）とジョン・ミルトンの政治的文献との関係において
3. 学会等名 第2回西欧思想研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chine Sonoi
2. 発表標題 A quest for liberty in Robert Southey's Joan of Arc (1796) in relation to John Milton's political writings
3. 学会等名 British Milton Seminar (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 17世紀～18世紀におけるミルトン批評の問題点
3. 学会等名 第3回西欧思想研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chine Sonoï
2. 発表標題 Polemics in defence of liberty in Southey's Joan of Arc (1798) and in John Milton's writings
3. 学会等名 Robert Southey and Romantic-era literature,culture and science: 1797, 1817, a Bicentennial Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 ジョン・ミルトンと1650年代イギリス社会における自由思想
3. 学会等名 第1回西欧思想研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 ミルトンとイタリア旅行--自由の思想への影響
3. 学会等名 第7回西欧思想研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 William Wordsworth, Salisbury Palin Poems, and the Slave Trade
3. 学会等名 第8回西欧思想研究会
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 ワーズワースと反奴隷貿易詩
3. 学会等名 第9回西欧思想研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 ミルトンと自由の概念--『失樂園』を中心に
3. 学会等名 第10回西欧思想研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 Cromwell and Milton--宗教的真實を求めて
3. 学会等名 第11回西欧思想研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 園井 千音
2. 発表標題 18世紀イギリスにおけるミルトン作品出版とコモンウェルズメンとの関係
3. 学会等名 第12回西欧思想研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉本 美穂
2. 発表標題 イギリス国民意識形成の基盤--シェイクスピア史劇における国家的自由への希求
3. 学会等名 第9回西欧思想研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 園井 ゆり
2. 発表標題 トマス・コーラムの動機と18世紀ロンドン・ファウンドリングホスピタルの創設
3. 学会等名 第9回西欧思想研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平田 耕一
2. 発表標題 出版物に見る16世紀後半から17世紀前半イングランドにおける科学的潮流2
3. 学会等名 第9回西欧思想研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 園井 ゆり
2. 発表標題 The Sociological Aspects of the English Poor Laws in the 18th -Century -England
3. 学会等名 第10回西欧思想研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平田 耕一
2. 発表標題 出版物に見る16世紀後半から17世紀前半イングランドにおける科学的潮流 1
3. 学会等名 第5回西欧思想研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 園井 英秀
2. 発表標題 マーヴェル詩作の外見と真実
3. 学会等名 第11回西欧思想研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	平田 耕一  (HIRATA Koichi)  (20274558)	九州工業大学・大学院情報工学研究院・教授   (17104)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	杉本 美穂  (SUGIMOTO Miho)	福岡女学院大学・人文学部・非常勤講師   (37118)	
研究協力者	園井 英秀  (SONOI Eishu)  (00069709)	九州大学・大学院人文科学研究院・名誉教授   (17102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	園井 ゆり  (SONOI Yuri)  (40380646)	広島大学・人間社会科学研究科（総）・准教授    (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	バーミンガム大学	レスター大学	ド・モンフォール大学	